

# 農業へのマイクロファイナンス

伊藤 友見

日本経済研究所国際局 主任研究員

## 1. はじめに

マイクロファイナンスといえば、バングラデシュのモハド・ユヌス氏と同氏が総裁を務めるグラミン銀行が2006年ノーベル平和賞を受賞し、近年特に注目が集まっている。マイクロファイナンスは、貧困者に対して融資、預金その他の基本的な金融サービスを提供することであり、貧困削減の有効なツールの一つとしての認識が広がっている。しかし農業へのマイクロファイナンスについては、ごく短期の運転資金を中心とする少額融資、週ごと等頻度の高い返済など従来行われてきたマイクロファイナンスの主な手法を、種まきから収穫まで一定の期間を要しリスクの高い農業にそのまま適用することが難しいと考えられており、その成功例はまだ限られている<sup>1</sup>。

2007年3月、フィリピンにおいて同国の The Southeast Regional Center for Graduate Study



東南アジアにおける農業マイクロファイナンスの課題克服についての専門家会議

and Research in Agriculture と Center for Agriculture and Rural Development（マイクロファイナンス機関）の共催により「東南アジアにおける農業マイクロファイナンスの課題克服についての専門家会議」が行われた。マイクロファイナンス機関職員、政府政策立案者、ドナー、研究者などが集まり、農業マイクロファイナンスについてリスク管理、規制、ガバナンス、持続可能性という観点から議論が行われた。この会議では、フィリピンのアキノ元大統領のスピーチも行われた。フィリピンにおいては貧困が大きな課題であり、マイクロファイナンスが貧困削減に果たす役割が特に重視されているが、今回のアキノ元大統領の会議への出席は、政界リーダーによるマイクロファイナンスへの高い関心を示す一例であろう。

本稿では本会議参加の経験と既存の文献調査に基づき、農業マイクロファイナンスの特徴や従来のマイクロファイナンス手法を農業融資へ適用する際の留意点について整理し考察する。



アキノ元大統領、会議発表者と

<sup>1</sup> CGAP（2004）

## 2. マイクロファイナンスとは

貧困者は、融資を受けるための担保がない、取引金額が少額である、などの理由から一般的な金融機関からの借り入れや預金は困難であるが、事業の開始・拡大や病気・災害・事故などの外的リスクによる影響を軽減するために、安定的で安全な融資、預金、保険等の多様な金融サービスを必要としている。マイクロファイナンスは、強制貯蓄やグループ保証等による担保代替、グループ融資によるメンバー間の相互審査／相互モニタリングや取引費用の低減、返済パフォーマンスに応じた取引継続／融資金額増加等による返済へのインセンティブ付け、返済回数・頻度を高めることによる定期的なモニタリング・返済の確実化など、貧困者に金融サービスを提供する場合の課題に対応し高い返済率を確保するための工夫を行い、貧困層への金融サービスを供与してきている。

マイクロファイナンスといえば前述のバングラデシュのグラミン銀行が有名であり、そのアプローチは世界の30カ国以上で採用されている。グラミン銀行のアプローチの他にも様々な方法があり<sup>2</sup>、またマイクロファイナンスを実施する機関も NGO や協同組合、商業銀行など多様である。

マイクロクレジット・サミット・キャンペーン<sup>3</sup>によれば、2005年末現在、世界の3,133のマイクロ

クレジット機関による顧客は合計約1億1,300万人に達しており、そのうち約8,200万人が最貧困層と報告されている。このようにマイクロファイナンスは、1980年代から20年程度の間で大きく成長してきている。

## 3. 農業へのマイクロファイナンス

農業へのマイクロファイナンスは、従来のマイクロファイナンスに比較してリスクが高いと考えられている。前述の通りマイクロファイナンスは拡大してきているが、CGAP<sup>4</sup>のペーパーによれば、有力なマイクロファイナンス機関であっても、より難しい農村市場に参入し実験的にサービス提供を開始したのはここ数年のことであり、農業へのマイクロファイナンスについてはまだ成功事例は少ない状況である<sup>5</sup>。

農業は早魃や洪水など自然災害により重大な被害を受ける。また、キャッシュフローは不定期的で、農業活動に必要な資金が不足している小規模農家にとっては、担保がないため一般的な金融機関からの融資を受けることは容易でない。

農業への融資に関する主なリスクとしては、生産リスクや価格リスクがある。天候や自然災害によって農作物の生産量は大きな影響を受ける。また、農作物の価格の変動によるリスクもある。農作物の需給状況について事前に把握できず植え付け時に価格

<sup>2</sup> グラミン銀行の手法としては「グループレンディング」が特徴的だが、最近ではグループ融資から個人融資への移行がマイクロファイナンス機関に見られており、グラミン銀行自身も2001年より新しい方式（Grameen Generalized System）を導入し、個別顧客の状況への柔軟な対応を可能にする軌道修正を行っている（Armendariz de Aghion and Mordoch (2005) P14及び <http://www.grameen-info.org/bank/bank2.html>）。

<sup>3</sup> マイクロクレジット・サミット・キャンペーンは、1997年より開始されたアメリカの NGO リザルツ教育基金のプロジェクトで、2005年までに1億の最貧困家庭への融資供与を目標として実施された。2005年末現在、最貧困家庭への融資は約8,200万件であった。更に2006年より同キャンペーンのフェーズ2が実施されている（2015年末までに1億7,500万の貧困家庭への融資実施と、1億の最貧困家庭を1日1ドル以下の生活から1ドル以上への引き上げを目標）。Microcredit Summit Campaign (MSC), “State of the Microcredit Summit Campaign Report 2006” (Washington D.C.: MSC, 2006). P18

<sup>4</sup> CGAP とは Consultative Group to Assist the Poor（貧困者支援協議グループ）の略称で、途上国における貧困者の金融サービスへのアクセス拡大を図るための援助機関のコンソーシアム。

<sup>5</sup> CGAP (2005a) P5

がわからない等の価格リスクや、国際市場の変化による農作物価格への影響等がある<sup>6</sup>。国際市場の変化による農産物価格への影響については、CGAPのペーパーにおいて、ベトナムコーヒーの国際市場への参入がラテンアメリカのコーヒー生産者に与えた影響が例示されている。このケースでは、コストの高いラテンアメリカのコーヒー生産者が打撃を受け、それらの小規模生産者への融資を中心に行っていた商業銀行に多額の不良債権が発生した事例が紹介されている<sup>7</sup>。

従来のマイクロファイナンスの手法は主に少額の運転資金の短期融資を、週毎や月毎など定期的かつ頻度の高い返済回数を設定して実施している手法が特徴的である。しかし、前述の生産リスクや価格リスクに加え、農業は季節性が大きくキャッシュフローが不定期であるため、週ごと等定期的で頻度の高い返済スケジュール等を、農業へのマイクロファイナンスにそのまま適用することは難しいと考えられている<sup>8</sup>。

#### 4. 従来のマイクロファイナンス手法の農業融資への適用

では、農業特有のリスクを軽減し、従来のマイクロファイナンスの手法を農業への金融に適用するためには、どのような方法があるだろうか。

前述の「東南アジアにおける農業マイクロファイナンスの課題克服についての専門家会議」における発表では、特に農業マイクロファイナンスを実施する際の留意点として、農業収入だけでなく世帯の全収入のキャッシュフローに基づく返済能力の判断、農業のキャッシュフロー・パターン等農業の特性を踏まえた商品設計（支払い時期や頻度など）、農業

特有のリスクを管理するための戦略・体制の構築、リスク管理において先物為替や天候指標ベースの保険等の活用可能性、また、農村の金融システムの安定を図りつつも実験や革新を促進するような政策・規制環境の整備等が挙げられていた<sup>9</sup>。

農業へのマイクロファイナンスについては成功事例がまだ少ないとされるなか、前述のCGAPの調査では数件のマイクロファイナンス機関のケーススタディ調査を実施し、農業マイクロファイナンスの成功要因について分析を行っている。この分析では、農業特有のリスクを低減するための要素として、前述に共通する事項のほか、

- グループ保証など人物をベースにした融資手法だけでなく、農業の知識を活用して借手手の選別や融資期間の設定などを行うこと
- 収穫までの期間に備えられるよう貯蓄サービスを提供すること
- 農業向け融資を一定割合に抑える、或いは対象借手が農業以外の収入源を持つことを要件とする等、マイクロファイナンス機関のポートフォリオ・リスクを分散すること
- 農作物の買い手など既存の農業関連産業と連携すること
- 農村における金融サービスの提供に郵便局など既存のインフラを活用する、またATMなどの技術を用いて取引コストを削減しサービス提供を拡大すること
- 政治的干渉から隔離されていること

等が抽出されている。このように、まずはサービス供給対象である農業についての理解を深め、その特性に適した手法の開発やリスク管理体制の構築、コスト削減など人口密度の低い農村地域へのサービス

<sup>6</sup> CGAP (2005a) P2-3

<sup>7</sup> CGAP (2005a) P3

<sup>8</sup> Armendariz de Aghion and Mordoch (2005) P133, CGAP No.2 P1

<sup>9</sup> Llanto (2007), Fernando (2007)

供給を持続的に実施する体制などが重要と考えられるが、農業へのマイクロファイナンスについての経験はまだ少なく、そのモデルについて幅広い合意は形成されていない状況である<sup>10</sup>。

## 5. 終わりに

農業へのマイクロファイナンスについては、経験や事例はまだ少ない。そのため、今回マニラで開催された「東南アジアにおける農業マイクロファイナンスの課題克服についての専門家会議」のような場において、この分野での取り組み経験についての共有や課題についての議論が行われることは有意義である。今後、農業の特性に適した金融商品設計、農業特有のリスクの特定やリスク管理体制の構築、遠隔地・過疎地へのサービス供給にあたっての費用削減等に有益となる、農業へのマイクロファイナンスの経験や成功事例についての調査や分析が更に進むことが期待される。

### 参考文献：

Armendariz de Aghion, Beatriz and Morduch, Jonathan (2005), *The Economics of Microfinance*, Cambridge, MA: MIT Press

Choudhury, Shafiqul Haque (2007), “Problems of Agricultural Microfinance” Paper presented at the Regional Experts' Consultation Meeting on “Overcoming Obstacles to Agricultural Microfinance in Southeast Asia”

Consultative Group to Assist the Poor [CGAP] (2004) “Microfinance Institutions Moving into Financing for Agriculture” Information Note

on Microfinance and Rural Finance No.2. Washington, DC: CGAP

CGAP (2005a) “Managing Risks and Designing Products for Agricultural Microfinance: Features of an Emerging Model” Occasional Paper No.11. Washington, DC: CGAP

CGAP (2005b) “CGAP Case Studies in Agricultural Microfinance: An Overview” CGAP Agricultural Microfinance Case Study No.1. Washington, DC: CGAP

Fernando, Nimal A. (2007), “Managing Microfinance Risks: Some Observations and Suggestions” Paper presented at the Regional Experts' Consultation Meeting on “Overcoming Obstacles to Agricultural Microfinance in Southeast Asia”

Ledgerwood, Joanna (1999) *Microfinance Handbook: An Institutional and Financial Perspective*, Washington DC: The World Bank

Llanto, Gilberto M. (2007), “Overcoming Obstacles to Agricultural Microfinance: Looking at Broader Issues” Paper presented at the Regional Experts' Consultation Meeting on “Overcoming Obstacles to Agricultural Microfinance in Southeast Asia”

奥田英信、三重野文晴、生島靖久 (2006) 「開発金融論」日本評論社

岡本真理子、栗野晴子、吉田秀美 (1999) 「マイクロファイナンス読本：途上国の貧困緩和と小規模金融」明石書店

<sup>10</sup> CGAP (2005a) P3-43